

多義語モトの意味分析

—プロセス性の観点から—

長谷部 亜子

1. はじめに

日本語に限らず様々な言語において、空間的な意味と時間的な意味を有する多義語が存在することが知られている。そのような多義語のうち日本語の名詞としては**アト**、**サキ**、**マエ**などがあり、これらの語の意味に関して近年多くの研究が行われている(舩山 1992、国広 1997、阿部 2000、碓井 2002、魏 2003、篠原 2008 等)。

本稿で取りあげる多義語**モト**も、次の例(1)～(3)からわかるように、空間用法と時間用法のある語である¹⁾。尚、<>や<<>>内の語は、**モト**の意味を示している。

空間用法

(1) 青空の**モト**で子どもたちが駆け回っている。 <下>

(2) 木を**モト**から切る。 <付け根>

時間用法

(3) あの歌手は、**モト**は教師だった。 <以前>

しかしながら、**モト**には、次の例(4)～(7)のように、空間用法、時間用法のどちらの用法にもあたらないものが存在する。

(4) 大地震が発生したという想定**のモト**、訓練を行う。 <状況>

(5) 交通事故で負った傷が**モト**で亡く

なった。 <要因>

(6) 酒の**モト**となる米を選ぶ。 <材料>

(7) 香りの**モト**をたどっていくと、そこにはキンモクセイが咲いていた。

<発生源>

モトには、さらにこの他にも多くの意味があるが、先行する研究論文はなく²⁾、多義構造は明らかにされていない。

2. 研究の目的と方法

本稿では、現代語**モト**の用例約 2000 例³⁾に基づき、意味の観点から共時的な分析を試み、その多義構造を明らかにする。また、**モト**の多義構造を明らかにする上で、**モト**の各意味同士の関連性を指摘する。ただし歴史的な意味派生の問題を議論することはしない。

尚、本稿で扱う用例は**モト**の単独用法に限る。複合語(販売**モト**(元)、目**モト**(元)、**モトモト**(元々))や助数詞(ひと**モト**、ふた**モト**)は除く。また単独用法でも、固有名詞(木**ノモト**(本)さん、味の**モト**(素)等)は除く。また用例は、インターネット上の新聞記事検索サイト、書き言葉均等コーパス、青空文庫等の電子媒体から収集したもののほか、電子化されていない小説やエッセイのものも扱う⁴⁾。

本稿では、上記の方法にしたがって収集した用例を、まず意味ごとに大別する。その後、各意味にプロセスが関与するか

どうかという点に注目し分析を行う。これは、先に指摘したようにモトという語が、単純に空間か時間かという観点からでは分類することができないためである。

ここで、分類基準である“各意味にプロセスが関与するかどうか”という点について説明する。先にあげた(5)を例に考えると、

(5) 交通事故で負った傷がモトで亡くなった。 <要因>

「傷」が<要因>となって、なんらかのプロセスを経たのち、「亡くな」という結果に至っている。このようになんらかのプロセス(時間の経過)が認められ、かつ、そのプロセスを時間的に遡ってモトがプロセスの起点を指す場合を、本稿では“モトの意味にプロセスが関与する”と判断し、プロセス用法とした。先に挙げた(1)~(7)の中でこのプロセス用法に該当するものは、(5)のほか、(6)や(7)、時間用法の例(3)がある。

一方、プロセスが関与しないものとは、先の用例(1)、(2)、(4)にあたる。(1)の場合を例にとると、「青空のモト」における「青空」と「モト」との間にはプロセスは存在しない。こうしたものを本稿では非プロセス用法と呼ぶ。

このようにプロセス用法、非プロセス用法に大別したのち、それらを細分化し、モトの多義構造を明らかにする⁵⁾。

3. 意味分析

モトは、その語源が<木の根もとのあたり>であるとする説⁶⁾と、<物事の起り>であるとする説⁷⁾とがある。本稿では、前者の説である<木の根もとのあ

たり>に類する<付け根>という意味から分析を始める。尚、この<付け根>は、プロセスが関与しない非プロセス用法に属するものである。

本節では、まずこの非プロセス用法を意味の観点から<付け根><下><存在場所>の三種類(表1の下位項目1①~③)に分け、プロセス用法においても同様に<起点にあるもの><以前の状態><以前>の三種類の下位項目(表1の下位項目1④~⑥)に分け、それぞれ分析を行う。

尚、この非プロセス用法、プロセス用法に属するそれぞれ三種類ずつ(合計六種類)の下位項目1①~⑥は、さらに細かな意味を有する場合があります(表1の下位項目2)、それらについても検討する。

【表1】モトの意味分類

プロセスの関与	下位項目1	下位項目2
非プロセス用法	①<付け根>	《植物の付け根》 《物の付け根》
	②<下>	《物理的な下》 《概念的な下》
	③<存在場所>	
プロセス用法		《発生源》
	④<起点にあるもの>	《起源》 《要因》
		《材料》
	⑤<以前の状態>	
	⑥<以前>	

以下ではそれぞれの下位項目の意味を分析する際、その意味が、他のどの意味とどのように関連しているのかという点についても明らかにしていく。

3.1 非プロセス用法

3.1.1 <付け根>：非プロセス用法

次の用例(8)(9)におけるモトは、ともに<付け根>という意味になる。

(8) 住民からの苦情が相次ぎ、管理している区の北沢地域公園事務所が九月上旬、ほぼ枝のモトから刈り込んだため

だ。(1998.10.23 朝日新聞)

(9) 花の持ち手を結びリボンを新体操のように宙に舞わせながら、五つの輪飾りを作る。(中略)左手で輪飾りの**モト**をもち、右手でリボンを飛ばすようにして輪をこしらえる。

(1997.9.17 朝日新聞)

用例(8)の「枝の**モト**」は、<付け根>と言っても特に<植物の付け根>を意味する。一方、用例(9)の場合は、<<物の付け根>>を意味する。これらに該当する語例を以下の表2に挙げる。

【表2】 <付け根>の語例

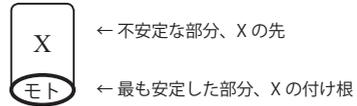
<付け根>	語例
<植物の付け根>	木の モト /枝の モト /わた毛の モト
<物の付け根>	包丁の モト /刀の モト /（筆の）毛の モト /結髪 のモト /輪飾り のモト

この二種類の<付け根>に共通する特徴として考えられるのは、両者とも**モト**が、ある物X（以下X）の一部分であるという点である。さらに、<付け根>を指して「Xの**モト**」という場合、Xは常に不安定な部分を有していることが明らかになった。つまり、表2の語例でいえば、木、枝、わた毛にも、包丁、刀、（筆の）毛にも先があり、これらの先は固定されていない、不安定な部分である。そして、その対極にあって固定され、最も安定した部分を**モト**と言って表現するという点で共通している。

尚、両者の相違点は、植物か否かという点のみであるが、ここでこの相違点を指摘し両者を区別するのは、次項3.2で取りあげるプロセス用法との関連を指摘する際にこの点に関わるためである。

次の図1は、両者に共通する<付け根>のイメージを図式化したものである。

【図1】<付け根>のイメージ



3.1.2 <下>：非プロセス用法

モトという語には<下>という意味になるものもある。

(10) 青空の**モト**で子どもたちが駆け回っている。 = (2)

(11) オイルランプの光の**モト**で食事を済ませ、貴重な水を沸かして茶を入れたとき、電気が点いた。

(宮本輝『ここに地終わり海始まる』)

この(10)(11)の場合、物理的に存在するものをX（10：「青空」、11：「オイルランプの光」がそれぞれ対応）とすると、そのXに対し下方に位置する場所を指して、**モト**という語で表している。ただし、この場合、**モト**が指している場所は、単にXの<下>というわけではなく、Xの影響が及ぶ範囲、言い換えればXの支配が及ぶ場を指している。そして、このような**モト**を、本稿では<<物理的な下>>と称する。表3に、この意味に該当する語例（一部）をXの種類の違いによって天体、光、樹木の三種類に分け、示す。

【表3】 <<物理的な下>>の語例（一部）

Xの モト	語例
[天体]の モト	青空の モト /星空の モト /快晴の モト /太陽の モト /月の モト など
[光]の モト	陽光の モト /月明かりの モト /光の モト /木漏れ日の モト 電燈の モト /明かりの モト /照明の モト /松明の モト など
[樹木]の モト	木の モト /大木の モト /桜並木の モト /紅葉の モト など

一方で、次の(12)~(13)のように物理的な上下関係ではないが、<下>という

意味になる例もある。

(12)チームは鳩山幹事長の**モト**で党の情報発信の在り方を再検討する。

(2008.9.4 朝日新聞)

(13)法の**モト**の平等

これらの例においては、物理的な上下ではないものの、やはり何らかの形で上下関係が**モト**の意味に関与していると考えられる。用例(12)では、「鳩山幹事長」が権力者や支配者として概念上、支配関係の上に位置しており、その下(シタ)で「再検討する」のである。用例(13)の場合も同様に、「法」が支配的なものとして概念上、上に位置している。言い換えれば(12)や(13)の例においては、支配するものは上であり、支配されるものは下であるとする支配の上下のメタファー(Lakoff & Johnson 1980)が関与しているのである。本稿では、このような**モト**を、<下>の中でも特に「概念的な下」と呼ぶ。

尚、次の用例(14)は、一見すると支配の上下のメタファーが関与していないかのように感じられる。

(14)コール首相が初めて訪ソし、故アンドロポフ書記長と会談したのは、そういう陰悪な空気**のモト**だった。

(1988.10.29 朝日新聞)

しかし、この場合、「陰悪な空気」という状況による支配を受けていると考えられることから、この意味にも上下の支配のメタファーが関与していると考えられる。1節で挙げた例(4) = (15)や(16)も同様に支配のメタファーが関与しており、「概念的な下」と呼べるものである。

(15)大地震が発生したという想定**のモト**、訓練を行う。 = (4)

(16)旗揚げから10周年を迎え、「生活の中に演劇を」の合言葉**のモト**、けいこに励んでいる。(2008.11.21 朝日新聞) これらは、思考による支配と言えよう。

ただし、用例(16)の「**モト**」は、上でみた支配の上下のメタファーとは異なる上下のメタファーが関与している可能性も否定できない。(16)の場合、「合言葉**のモト**」の「合言葉」は、この文脈における行為「けいこに励む」際**のモト**であり、理想的な思想を意味する。このような場合、鍋島(2008)のいう、理想は上で現実の下であるとする理想の上下のメタファーが意味に関与しているとも考えられる。しかし、(16)においても、(15)と同じく思考による支配、被支配の関係が成り立つことから、理想の上下のメタファーと同時に支配の上下のメタファーが**モト**の意味に関与しているといえる。

以上のことから、**モト**が「概念的な下」という意味になる場合、全て支配の上下のメタファーが関与しているといえる。

尚、**モト**が本稿でみた<下>という意味になる場合、その表現形式は必ず「[名詞：X]の**モト**」という形をとる。これらの語例(一部)を表4に示す。

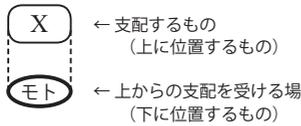
【表4】 「概念的な下」の語例(一部)

Xの モト	語例
[支配者]の モト	～長の モト /監督の モト /内閣の モト /～の指導の モト /～の指揮の モト /～の庇護の モト など
[状況支配]の モト	法の モト /～制度の モト /規則の モト /条件の モト /状況の モト /空気 のモト /環境の モト /～経済の モト /重圧の モト /競争社会の モト など
[理想・思考]の モト	合言葉の モト /スローガンの モト /理念の モト /～という名の モト /美名の モト /～という考えの モト /想定の モト /惑惑の モト など

以上の分析の結果、**モト**の非プロセス

用法のひとつ<下>の下位分類には、《物理的な下》と《概念的な下》の二種類があることが明らかになった。また、両者はともに上下のスキーマに基づき意味が成立していることが指摘できた。これをまとめて図示したものが図2である。

【図2】<下>のイメージ



3.1.3 <存在場所>：非プロセス用法

用例(17)と(18)は、形式の面では3.1.2でみた<下>の場合と同じである。しかし、これらの例におけるモトの意味には上下のスキーマは関与せず、したがって<下>という意味にはならないものである。

(17) クラウン副社長は、デモが終わると即座に高本社長のモトに歩み寄り、(略) (2007.11.28 日本経済新聞)

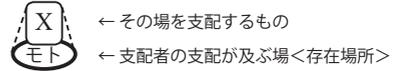
(18) けなげに答える少年のモトに、洋食屋からカレーライスが運ばれてきた。(2007.12.2 日本経済新聞)

※下線は筆者

これらの例におけるモトは、それぞれ(17)「高本社長」と(18)「少年」がいる<存在場所>という意味になる。こうした解釈が成り立つ背景には、先の3.1.2で指摘したように、モトには何かの支配を受ける場としての意味があることが考えられる。言い換えれば、「Xのモト」のX(17:「高本社長」や18:「少年」)が単にその場の支配者であり、モトはその支配が及ぶ場、つまり支配者の<存在場所>という意味になるのである。さらに、このモトは<下>という意味にはならない。それ

は、「高本社長」や「少年」が物理的にも概念的にも上には位置しないとの理由による。つまり、ここでは3.1.2で見た<下>における支配と被支配の関係のみが残され、単に支配者の<存在場所>という意味になっているのである。

【図3】<存在場所>のイメージ



尚、この<存在場所>に該当する場合、表現形式は、必ず「[名詞：X]のモト」という形になり、これは3.1.2<下>の場合と同じ形式である。

3.1.4 非プロセス用法のまとめ

モトの非プロセス用法には、大別すると①<付け根>、②<下>、③<存在場所>の三種類の意味があった。これらのうち、①<付け根>は、《植物の付け根》と《物の付け根》とに分かれた。この両者には、共通してモトが指す部分が安定しているという特徴があった。

また、モトが《植物の付け根》を指す場合、それは下に位置しているという特徴もあった。この下に位置しているという概念は、②<下>にも通ずる。この②<下>という意味は、《物理的な下》と《概念的な下》の二種類に分類できた。両者に共通する点は、上下のスキーマが背景にあり、さらにさまざまな種類の支配の上下のメタファーが意味の成立に関与しているということであった。

この支配の上下のメタファーから、上下の概念を除くと、支配と被支配の関係のみが残る。そして、被支配を支配の及ぶ場として捉えることにより③<存在場所>という意味が成立した。以上の共通

点や類似点、相違点を考慮し、表5にまとめると。

【表5】非プロセス用法の意味特徴一覧

意味 特徴	① <付け根> 《植物の付け根》 《物の付け根》	② <下> 《物理的な下》 《概念的な下》	③ <存在場所>
	プロセス	-	-
安定性	+	-	-
上下	φ	+	-
支配	-	+	+

+：あり、-：なし、φ：不関与

3.2 プロセス用法

本節冒頭において述べたように、**モト**のプロセス用法には、三種類の下位分類<起点にあるもの>、<以前>、<以前の状態>がある。

以下では、前項3.1において分析した非プロセス用法と関連のある<起点にあるもの>という意味の分析から始める。

3.2.1 <起点にあるもの>：プロセス用法

以下の用例(19)~(22)における**モト**の意味成立の背景には、すべてプロセスの存在が想定できる。

(19)サケが生まれた川の支流に戻って産卵を行う時、行き先を判断する一つの決め手が「**に**におい」。幼い頃になじんだ**に**においの**モト**へ戻っていくことが、実験でも確かめられた。

(2009.10.24 朝日新聞)

(19)の例では、「**モト**」は「**に**におい」発生プロセスの起点にあたり、「**に**におい」はそこからのプロセスの結果生じるものである。したがって、プロセスは「**モト**」から「**に**におい」へと向かう。一方、「**に**においの**モト**」という際の認知主体の心的視線は、そのプロセスとは逆方向（「**に**におい」から「**に**においの**モト**」）で、プロセスを時間

的に遡っている。

以下(20)~(22)の例も同様の解釈が成り立つ。

(20)エコノミーの語源を知っているだろうか。古代ギリシャ語のオイコノモコス。その**モト**は「オイコス」。オイコスは「家計」という意味だった。

(2007.1.1 日本経済新聞)

(21)サリドマイドは、アミノ酸のひとつグルタミン酸を**モト**につくった誘導体だ。

(2007.12.19 朝日新聞)

(22)陸軍曹長だった夫の為雄さんは、戦後、シベリアに抑留され、そのとき患った病気が**モト**で復員後の二十二年に亡くなった。

(1984.8.15 朝日新聞)

(20)では、「オイコス」が「エコノミー」もしくは「オイコノモコス」の《起源》であり、「その(オイコノモコスの)**モト**」という形式で表現されている。ここでは「オイコノモコス」、そして「エコノミー」へと続く変化のプロセスの<起点にあるもの>が《起源》という意味で解釈される。この際の認知主体の心的視線は、(19)と同様プロセスの向きとは逆向きの方向で、時間的に遡っている。

【表6】<起点にあるもの>

プロセスの起点にあるもの (モト)	プロセスの向き	プロセスの結果
(19) に においの モト 《発生源》	→→→	に におい
(20) オイコス 《起源》	→→→	オイコノモコス
(21) グルタミン酸《材料》	→→→	サリドマイド
(22) 病気 《要因》	→→→	亡くなった

← 認知主体の心的視線の移動

(21)は、「サリドマイド」生成プロセスの<起点にあるもの>が《材料》として解釈され、それを**モト**で表し、その具体的な名称が「グルタミン酸」ということである。(22)においても、「亡くなる」に至

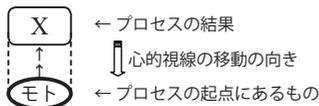
るまでのプロセスの〈起点にあるもの〉が**モト**という語で表され、《要因》として解釈されている。具体的な《要因》の名称が「病気」と述べている(表6)。

以上のことから、これら(19)～(22)に共通する点は次の三点にまとめられる。

- ・ **モト**からある結果に至るまでのプロセスが関与する
- ・ プロセスの〈起点にあるもの〉を**モト**で表す
- ・ 認知主体の心的視線はプロセスを時間的に遡る形になる

以上の共通点を考慮し、〈起点にあるもの〉をイメージ化したものが図4である。

【図4】〈起点にあるもの〉のイメージ



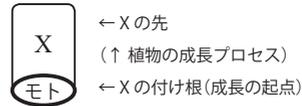
図中、上方向の矢印は、プロセスの向きを示しており、これは表6における左から右への矢印に相当する。また、図中下方向の矢印は認知主体の心的視線の移動の向きを示しており、これは表6における右から左への矢印、つまり心的視線がプロセスを時間的に遡って移動することを意味する。

ここで、本項で取りあげたプロセス用法〈起点にあるもの〉と前項で取りあげた非プロセス用法との関連を述べる。〈起点にあるもの〉と関連があるものは、前項で取りあげた非プロセス用法のうち、3.1.1の〈付け根〉であり、なかでも《植物の付け根》と関連がある。

植物にはそもそも成長するというプロセスがある。仮にその植物において成長プロセスというものを考えたとき、そのプロセスの〈起点にあるもの〉、中でも

《発生源》にあたるのは〈付け根〉の部分である(図1')。

【図1】〈付け根〉のイメージ



以上のことから、非プロセス用法の〈付け根〉、《植物の付け根》とプロセス用法の〈起点にあるもの〉の間には関連性があることが指摘できる⁸⁾。ただし、植物には成長のプロセスが存在するが、〈付け根〉や《植物の付け根》を表す場合の**モト**に、プロセス性が存在するわけではない。

3.2.2 <以前>：プロセス用法

次の用例(23)(24)は、**モト**が〈以前〉という意味になるプロセス用法である。

(23)ワコール(京都市)の人間科学研究所が今秋、(略)男性向けガードルを開発した。(略)**モト**は女性用として二〇〇五年に発売したが、男性用を求める声が相次ぎ改良した。

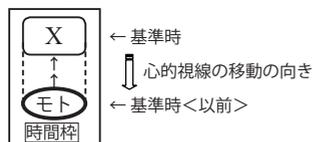
(2007.11.28 日本経済新聞)

(24)(逮捕された容疑者について)**モト**の上司も「頭がよくて仕事はできた」と評した。(2008.11.22 朝日新聞)

(23)(24)も、3.2.1でみた〈起点にあるもの〉と同じく、プロセスが存在する点、さらにそのプロセスを時間的に遡ったところに**モト**があるという点では共通している。しかし、ここでの**モト**は、3.2.1の《材料》や《要因》など〈起点にあるもの〉が具体的な事物を指していたのとは異なり、時間そのものを指しているという特徴がある。〈以前〉という意味になる場合、**モト**が指すものを時間という

枠組みで捉えている⁹⁾のである(図5)。

【図5】<以前>のイメージ



モトがこのように<以前>という意味になる場合の表現形式には、以下のようなものがある。

- ・Xはモトが(／は)Y
 - ・(Xは)モトから／モトより
 - ・(Xの)モトのY
- 語例) モトの生活／モトの上司／モトの状態、など
- ・[副詞的用法として]モトVた形＋Y／モトY
- (全体で名詞句)
語例) モトいた会社／モト社長、など

3.2.3 <以前の状態>：プロセス用法

モトには、<以前の状態>という意味もある(例25)。

(25)まず一方の手でふくらはぎをさすって温める。もう一方の手でつま先を持ち、自分の方へ伸ばしてから、いったん、モトに戻す。

(2007.11.17 日経プラス1)

(25)の例では、モトが<以前>という意味ではなく、<以前の状態>という意味になる。

この意味になる場合、表現形式に特徴があり、必ず次の二通りの形式で表される。

- ・Xをモトに[戻す、返すなど]
- ・Xがモトに[戻る、返すなど]

この「モトに戻す／戻る」という形式は、全て「モトの○○に戻す／戻る」に置き換えが可能である。そして「モトの○○」に

当たる部分は、文脈から、「以前の場所」や「以前の属性」といった語をあてはめることが可能であるが、それらはすべて<以前の状態>という語でまとめることができる。実際(25)の例でも、「モトの位置に戻す」と「モトの状態に戻す」の二通りの置き換えが可能である。

以上の形式特徴からわかることは、この形式で表される際は、文脈によらずモトが常に<以前の状態>という意味になるということである。そして、この<以前の状態>という形は「モトの○○」という形式に復元が可能で、この形式は先にみた<以前>の形式特徴にもある。

また、時間的に遡ることを示す「戻す」や「戻る」などの語と共起することから、この意味においてもプロセスを時間的に遡るという、プロセス用法に共通の意味特徴がある。

以上のことから、<以前>と<以前の状態>は、意味の面でも形式の面でも関連があるといえる。

一方、3.2.1 でみた<起点にあるもの>との関連では、特に《要因》や《材料》、《起源》といった下位項目の場合、それらは<以前の状態>とも言え、関連が認められる。両者の異なる点は、前者<起点にあるもの>の場合、具体的な事物を指すのに対し、<以前の状態>は具体的な事物ではなく、状態を指す点である。

3.2.4 プロセス用法のまとめ

3.2.1～3.2.3で行った分析の結果、モトのプロセス用法④<起点にあるもの>、⑤<以前の状態>、⑥<以前>には、次の類似点がある。

- ・モトの意味にプロセスが関与する
 - ・プロセスを時間的に遡る
- また、相違点は、次のとおりである。
- ・モトが具体的な事物を指しているか否か
 - ・モトが時間そのものを指しているか否か

これらの類似点と相違点を下の表7にまとめる。

【表7】プロセス用法の意味特徴一覧

意味特徴	④<起点にあるもの>	⑤<以前の状態>	⑥<以前>
プロセス	+	+	+
時間を遡る	+	+	+
具体的な事物	+	-	-
時間そのもの	-	-	+

4. おわりに

モトは、時間用法と空間用法がある多義語である。本稿では、それをプロセスの関与／非関与という観点からプロセス用法と非プロセス用法とに意味を二分し、それぞれに一段階または二段階の下位項目を設けて分析を行い、モトの多義構造を明らかにした。

その結果、非プロセス用法においては、<付け根>という意味があり、支配の上下のメタファーに基づいた<下>という意味、さらに支配と被支配という関係から<存在場所>という意味が成立することが明らかになった。また、それらは互に関連性があることも指摘した。

また、プロセス用法には、具体的な事物を指す<起点にあるもの>と時間そのものを指す<以前>、さらにそれに類する<以前の状態>という意味があり、認知主体の心的視線が時間的に遡るという点で共通することも指摘した。この非プロセス用法とプロセス用法との間に関連

性があることも、モトが指す部分が<起点>であるという共通点から明らかになった。

今後の課題としては、プロセス用法の<起点にあるもの>の多様な下位項目を精査すること、また、非プロセス用法の<下>の下位項目を精査すること、その上で表現形式を整理することなどが挙げられる。さらに、今回の分析で行った、プロセスが関与するか否かというアプローチが、対義語サキやスエなどにも適用することが可能かどうか検証する必要があると考えられる。

注

- 1) 古事記の用例から、モトには、上代既に空間用法、時間用法の意味が存在していたと考えられる。詳細については、長谷部(2010)を参照のこと。
- 2) 国語辞典、和英辞典、語源辞典、発音・アクセント辞典等に、意味に関する記述があるのみである。
- 3) 用例の各意味における使用数と使用率は、本調査では扱わないこととする。これは、ひとつにはモトという語に当てられる表記が多様(もと／本／元／下／基／素など)で、全数を調査することが困難だからである。また、新聞記事のデータベースを用いた検索の結果、意味によっては1日で1000以上の用例があるものもあった。この点からも、全数調査が困難であった。
- 4) 用例収集の際に使用したインターネットのURLは、それぞれ以下のとおり。
 - 朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱ」(<https://database.asahi.com/>)
 - NIKKEIテレコン21

(<http://telecom21.nikkei.co.jp/>)

●中日新聞・東京新聞記事データベース
(<http://www.cnc.ne.jp/ip>)

●青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)

●書き言葉均衡コーパス

(<http://www.kotonoha.gr.jp/>)

小説類については、本稿で用例を取りあげたもののみを挙げる。

●宮本輝『ここに地終わり海始まる(下)』
(1994)講談社文庫

5)分析の結果、各意味には共通する形式特徴が認められたため、本稿では、各意味における形式やその場合の語例についても扱うことがある。しかし、紙幅の関係上すべてを記載することはできなかった。これらについては別稿を期す。

6)『新訂字訓』p.720、『語源大辞典』p.253

7)『語源辞典 名詞編』p.275

8)プロセス用法の<起点にあるもの>や<以前>と非プロセス用法との関連性については、さまざまな国語辞典の記述を参照したが、明確に示されていないかった。

9)モト以外にも、<付け根>にあたる意味が時間枠として捉えられる語がある。「根っからのお人好し」や「土台無理な話」における「根っから」「土台」である。

参考文献

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳)『レトリックと人生』、大修館書店、1986年)

阿部宏(2000)「空間から時間へ：さき、

あと、まえ」『言語と文化』15：pp.191-204. 東北大学言語文化部

碓井智子(2002)「空間認知表現と時間認知表現—日本語「サキ」の認知言語学的考察—」『日本認知言語学会論文集』2：pp.150-159. 日本認知言語学会

魏聖銓(2003)「「あと、さき、まえ、うしろ」—プロトタイプの意味と意味転用—」『日本認知言語学会論文集』3：pp.54-61. 日本認知言語学会

国広哲弥(1997)『理想の国語辞典』大修館書店

篠原和子(2008)「時間メタファーにおける『さき』の用法と直示的時間解釈」篠原和子・片岡邦好(編)『ことば・空間・身体』：pp.179-211. ひつじ書房

鍋島弘治朗(2008)「現実と理想のメタファー—主観性および身体性との関連から」篠原和子・片岡邦好(編)『ことば・空間・身体』：pp.213-252. ひつじ書房

長谷部亜子(2010)「多義語モトの意味分析」表現学会第47回全国大会発表資料
舩山洋介(1992)「多義語の分析—空間から時間へ—」カッケンブッシュ寛子ほか(編)『日本語研究と日本語教育』：pp.185-199. 名古屋大学出版会

参考辞典(五十音順)

『語源辞典 名詞編』(2003)草川昇、東京堂出版

『語源大辞典』(1988)堀井令以知(編)、東京堂出版

『新訂字訓(普及版)』(2007)白川静、平凡社

(愛知学院大学大学院生)